May 2015 subject reports

Japanese A literature

Overall grade boundaries

Higher level

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 17	18 - 32	33 - 46	47 - 59	60 - 73	74 - 85	86 - 100

Standard level

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 16	17 - 30	31 - 43	44 - 56	57 - 69	70 - 81	82 - 100

Higher level internal assessment

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 5	6 - 10	11 - 13	14 - 17	18 - 21	22 - 25	26 - 30

提出された成果物のレベルの特徴および適切さ

すべての作品は「指定作家リスト」（ＰＬＡ）の異なるジャンルから選択されており、また、スタイル（文体）、内容ともに綿密な分析に適した複雑さを兼ね備えていました。第１部の個人口述コメンタリーに適した作品とは、スタイル（文体）に興味深い特徴が多く見られるものです。

今回提出されたサンプルは、質、レベルの幅ともに適切でした。また受験者、教師の声もよく録音されていました。教師の多くが適切な録音機材を使用し、評価に適切な場所を選んでいることがわかります。

１／ＩＡＲＦのコメントは受験者のパフォーマンスをよく反映したものになっており、このことから、教師が評価の実施後に録音を聞き直していることがわかります。しかし、コメントの中で受験者に付与した評点の理由を述べていないケースもありました。

教師の多くは個人口述コメンタリーの後に質問をしていますが、これがまったく行われていないケースもありました。第１部の個人口述コメンタリー終了直後に第２部のディスカッションに入るのではなく、質問をすることで、生徒が自分の能力や抜粋に対する考えをさらに示すことができるようにしてください。

ほとんどの場合において、「考察を促す問い」は質、数ともに適切であったものの、質問のいくつかは詩の解釈を限定するものでした。「考察を促す問い」の主要な目的は、受験者が論評を組み立てる上での出発点を提供することだということを忘れないようにしてください。ＨＬの「考察を促す問い」についてはＩＢ資料『「言語Ａ：文学」指導の手引き』の 79 ページの例を参考にしてください。

ほとんどの教師がパート２で学習した作品からの抜粋を使用しており、長さも適切でした。抜粋の長さは 20〜30 行が推奨されています。個人口述コメンタリーにあてられた時間は 10 分であるため、抜粋が長すぎると質疑応答に支障をきたします。抜粋の長さをきちんと把握するためにも、「試験問題１」と同様、抜粋の行に番号を振るようにしてください。

第１部の個人口述コメンタリー終了後、録音は止めず直ちに第２部のディスカッションに入らなければなりません。大切なのは、ディスカッションに入るまでどの作品を取り上げるかを受験者には知らせないようにすることです。少数ではありますが、教師がディスカッションで取り上げる作品をあらかじめ選んでいたことがうかがえるケースがありました。ディスカッションで使用する作品は無作為に決定されなければなりません。作品名を記した裏返しのカードを受験者に選ばせるなどの工夫をしてください。

教師の多くは、生徒がパート２で学んだ作品に対して独自の文学的なディスカッションを展開できるように評価を実施していました。ＨＬのディスカッションで用いることのできる質問の例についてはＩＢ資料『「言語Ａ：文学」指導の手引き』の 79 ページをご覧ください。

評価規準に基づく受験者の到達度

規準　Ａ

受験者の多くは詩の解釈を通じて自身の知識と理解を丁寧に示していました。しかし、型通りの説明や言い換えをしただけで、抜粋への言及に裏づけられた独自の解釈を示していない受験者も見受けられました。

規準　Ｂ

大半の受験者は、この規準においてある程度のレベルの力があることを示していました。この規準では、作者が使用する言葉、構成、スタイル（文体）の特徴に対する理解を示し、詩を適切に解釈することが期待されています。授業において、教師と生徒が作品をさらに詳細に考察することによって、この規準における受験者の到達度が改善されるでしょう。今回、高い評点を得た受験者は、作者が用いたスタイル（文体）上の工夫、技法、そしてそれらが読者に与える効果に言及していました。また、

International Baccalaureate® Baccalauréat International Bachillerato Internacional

修辞法をただ特定するだけでなく、その技法が作品の特定箇所に与える意味合いや主題との関わりもよく探究していました。

規準 C

受験者の多くは論評を構成する力を発揮できていました。しかし、論評の時間が５～６分のみの受験者も見受けられました。これは受験者の知識と理解が十分でないためと考えられますが、論評を組み立てる練習が足りなかったのも一因です。そのため、詩に関する知識や理解は示せても、焦点をしぼったうえで詩の箇所と自分の考えとを統合する力が足りないケースが見受けられました。また受験者は序論と本論との関係性にも注意すべきです。なぜなら序論は受験者の抜粋に対する総体的な見方を提示するからです。

生徒は、あらかじめ用意しておいた、作者や作品の文学史的位置づけ、時代背景を序論で述べるように教師からアドバイスを受けているようでした。こうした内容に言及することは、受験者が論評を始める際にある程度の安心感を与えますが、それで論評が高得点となるケースはほとんどありません。

規準 D

ディスカッションにおいて、多くの受験者は作品に対する知識と理解をよく示していました。教師の質問も適切で、作品の鍵となる問題を幅広く取り上げていました。受験者の回答もよく考察されたものになっており、作品をしっかりと学習したこと、また、自信があることがうかがえました。しかし、作品が含意するところを論じるのが難しかったためか、教師と受験者とのやりとりがレベルの高い文学的ディスカッションになっているケースはまだ少ないようでした。

規準 E

教師の質問は作品とよく関連付けられていました。そのため、受験者は作品に対する自身の知識と理解を落ち着いて示すことができていました。

受験者が力を発揮できるかどうかは教師の質問の仕方にもよるため、あらかじめ用意した質問で練習を行い、徐々に自然なディスカッションができるようにするとよいでしょう。

規準 F

受験者の多くは明瞭かつ簡潔に自分の考えを述べていました。しかし、緊張のためか、論評をうまく組み立てることができず、自分の力を十分に発揮できていない受験者も見受けられました。文学用語や幅広い語彙を駆使していた生徒は少数でした。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

論評はしっかりと構成されたものでなければなりません。つながりのないポイントを列挙しただけのものや、詩をただ単に描写し各行を言い換えただけのものは論評とは呼べません。

個人口述コメンタリーでは少なくとも２分間の質疑応答の時間を残すようにしてください。なお、試験官は制限時間の 10 分を超えた部分は採点しません。

「考察を促す問い」に関しては、１問は知識と理解、もう１問は作者の用いた技法についての分析に焦点をあてるようにしてください。これにより、生徒は自身の論評を評価規準の要件を満たすものにすることができるはずです。

International Baccalaureate® Baccalauréat International Bachillerato Internacional

「論評は作者の生い立ちで始めなければならない」など、規範的もしくは定型的なアプローチをとることは避けてください。

ディスカッションは自然なやりとりであるべきですが、教師は、生徒から文学的に興味深い回答をどのように引き出すかに気を配らなければなりません。そのため、作品に関連のある質問のリストを事前に作成しておくとよいでしょう。

その他のコメント

指導と評価に関する資料はすべてＯＣＣにあるため、手順に沿って口述試験を実施することは容易です。しかし、パート２の新たな内部評価は２部に分かれており、そのため、これらの２つの異なる課題にどのように取り組み、指導するかについてはさらに検討を重ねていく必要があります。

ほとんどの学校は抜粋および「考察を促す問い」を適切にスキャンしていましたが、「考察を促す問い」が添付されていないケースが稀にありました。学校は、抜粋と「考察を促す問い」が同一紙面に収まるよう教師に指示するようにしてください。「考察を促す問い」は２問までとなっていますが、１問は抜粋の内容を問うもの、もう１問はスタイル（文体）や修辞法を問うものにするとよいでしょう。

抜粋の長さに関しては、20～30行が推奨されています。抜粋が長すぎると、受験者が課題文の詳細を十分にとらえることができなくなる可能性があります。

抜粋に使用された The OCC Japanese Author List からの詩人は 、萩原朔太郎、中原中也、谷川俊太郎、三好達治、石垣りん、宮澤賢治、高村光太郎でした。

第２部のディスカッションは、インタビューやプレゼンテーションではありません。評価を実施する前に質問を準備することは認められていますが、予定した流れに固執するべきではありません。自然な流れ、つまり生徒の返答に応える形で質問がなされる方が高い評点につながる傾向があります。受験者が制限時間まで１人で話し続けるのはディスカッションというよりはむしろプレゼンテーションであり、これではディスカッションが別の評価要素である「個人口述プレゼンテーション」と似通ったものになってしまいます。

学校の多くは静かな部屋で内部評価を実施していましたが、電話の鳴る音、授業の開始を告げるベルなどが録音されているケースもありました。

Standard level internal assessment

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 4	5 - 8	9 - 12	13 - 16	17 - 19	20 - 23	24 - 30

提出された成果物の特徴および適切さ

すべての作品は「指定作家リスト」（ＰＬＡ）の異なるジャンルから選択されており、また、スタイル（文体）、内容ともに綿密な分析に適した複雑さを兼ね備えていました。しかし上級レベルの影響からか、詩が多く選択される傾向が見られました。高村光太郎の詩が最も多く、中原中也、萩原朔太郎の詩も好まれています。散文では芥川龍之介の短編が多かったです。

サンプルの質は平均してよいと言えます。また１／ＩＡＲＦの教師のコメントは受験者のパフォーマンスをよく反映しており、評価規準に照らして評点が付与されていました。

「考察を促す問い」に関しても、ほとんどの場合において数、質ともに適切でした。

教師の多くは、受験者が 10 分間論評を続けない限り、論評の終了後に質疑応答の時間をとっていました。また、質問は受験者の知識と理解をより明確にするもので、受験者は自身の考えを示す機会を得ることができていました。

抜粋はパート２の作品から選択されており、長さもほとんどの場合において適切でした。しかし抜粋の長さは 20～30 行が推奨されていることに気づいていない教師もいるようでした。論評に与えられた時間は 10 分間であり、したがって抜粋が長すぎると質疑応答のための時間がとれなくなる可能性があります。抜粋の長さをきちんと把握するためにも、「試験問題１」と同様に行に番号を振るとよいでしょう。

評価規準に基づく受験者の到達度

規準 A

受験者の多くは抜粋に対する適切な知識と理解を示し、抜粋箇所と作品全体との関係も意識していました。しかし作品と作者についての一般的な知識を述べるに留まり、抜粋についての深い理解を示すことができなかった受験者も見受けられました。また作品の要約やあらすじを述べるだけの受験者もいました。

詩の論評においては、作者と語り手の違いに気をつけることも大切です。この区別が意識されていない場合、詩の中のすべての表現や感覚が、自伝的なものとしてとらえられることになってしまいます。

この評価規準では受験者の独自の理解と分析が求められています。抜粋の中の細かな表現に基づいて自身の考えを聞き手にどう伝えるかに注意を払うことにより、論評のスキルが向上することでしょう。

規準 B

大半の受験者は作者が用いた修辞法を指摘することができていました。しかし、修辞法を特定するだけでなく、その技法が作品にどのような効果をもたらしているのか、もしくはその技法を選択したことがなぜ重要なのかも明らかにする必要があります。したがって、受験者はこのような議論を展開できるように学習を積み重ねていかなければなりません。

規準 C

受験者の多くは論評を構成する力を発揮できていました。しかし、論評が短かったり、論評の目的が明確でなかったりするケースも見受けられました。このようなケースにおいては、「考察を促す問い」に答えただけの受験者、抜粋の適切な箇所を引用しながら自身の理解を示すことができない受験者が

International Baccalaureate® Baccalauréat International Bachillerato Internacional

目立ちました。また、受験者は抜粋についての自身の知識や理解を示すだけでなく、それをどのようにして、説得力のある形で聞き手に伝えるかにも注意を払わなければなりません。序論は受験者の抜粋に対する総体的な見方を提示するため、序論と本論とのつながりにも気をつける必要があります。受験者の多くは行を追いながら論評を行っており、この傾向は、詩の論評において特に強く見られました。このアプローチは、論評に少なくともある程度の構成を与え、必然的に特定箇所についての分析も促します。

規準 D

受験者の多くは明瞭かつ簡潔に自分の考えを述べていました。しかし、緊張のためか、力を十分に発揮できていない受験者も見受けられました。これらの生徒は、考えを述べるのに必要な語彙や慣用句を十分にもっていない傾向があります。また、文学用語を使いこなしていた受験者は少数でした。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

口述試験には４つの評価規準があり、教師も生徒も各規準の内容を熟知しておく必要があります。最も重要なことは、抜粋と作品に対する自分の考えをどのように表現するかを指導することです。したがって、教師は、評価に先立って生徒と抜粋や重要な一節についてディスカッションする機会を設けるとよいでしょう。また、生徒が自分のプレゼンテーションを自己採点するのも効果的です。

受験者は、論評の制限時間を超過しないよう、論評後の質疑応答のための時間を２分間とっておく必要があることを認識しなければなりません。

受験者は、作者の言葉遣い、構成、スタイル（文体）、修辞法についての自身の理解をどのように示すことができるかについて、しっかりとした指導を受ける必要があります。

受験者は語尾を「である調」にする必要はありませんが、的確かつ明瞭な日本語を話すことを心がけ、練習を重ねる必要があります。

その他のコメント

指導と評価に関する資料はすべてＯＣＣにあるため、手順に沿って口述試験を実施することは容易です。多くの学校は定められた手順に従って評価を実施していました。

ほとんどの学校は抜粋および「考察を促す問い」を適切にスキャンしていましたが、「考察を促す問い」が添付されていないケースが稀にありました。学校は、抜粋と「考察を促す問い」が同一紙面に収まるよう教師に指示するようにしてください。

抜粋の長さに関しては、20～30行が推奨されていますが、これよりも短い抜粋（例えば、教師が選択した和歌、短歌、俳句をいくつか列挙したもの）でも問題ありません。抜粋は長さよりも、内容が論評に適当であるかどうかが重要です。

受験者が論評に８分以上費やさないよう注意してください。口述試験の制限時間は筆記試験の制限時間と同様、厳密に管理されなければなりません。教師は２分間の質疑応答の時間を設ける必要があり、試験官は制限時間の 10 分を超えた部分は採点しません。

International Baccalaureate® Baccalauréat International Bachillerato Internacional

Higher level written tasks

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 6	7 - 9	10 - 12	13 - 15	16 - 18	19 - 20	21 - 25

提出された成果物の特徴および適切さ

ほとんどの受験者がＨＬにふさわしい力をもっていることが課題の質からうかがえました。特に、作品に対する知識と理解はよく示されていました。しかし、それが選択した課題のテーマとうまく結びついていないケースが見受けられました。いかに作品に対する知識と理解が深くても、テーマの分析に役立っていなければ、高得点は望めません。また「振り返りの記述」に含める内容について、しっかりと理解していない受験者が多く、文学的な論文の書き方をきちんと学んでいないと思われる受験者も見受けられました。脚注をつけていないケースが目立ちましたが、間接引用まできちんと注をつけている小論文が少ないのは残念です。

評価規準に基づく受験者の到達度

規準Ａ：「振り返りの記述」では、「対話形式の口述活動」を通じて、作品の文化的および文脈的な要素に対する理解がどのように発展したかを述べなければなりません。「対話形式の口述活動」の内容を要約したり、作品に対する理解を示したりするだけでは不十分です。「考えの発展」をしっかりと意識して書かれた課題は高得点を得る傾向があります。

規準Ｂ：多くの受験者が作品を正しく理解しており、作品に対する正確な知識を有していることがうかがえました。個性的な作品解釈を展開している受験者も見受けられましたが、重要なのはその論拠です。論拠なしに自己の考えを述べても、それは説得力につながりません。また、高校生であるとはいえ、作品のストーリーやその中の人間関係を理解するだけでは、レベルの高い小論文は書けません。作者の意図を考えたり、行間を読んだりするような鋭い洞察力を示すことが求められています。

規準Ｃ：この規準においては、作者の言葉遣い、構成、技法およびスタイル（文体）についての分析が求められていますが、もちろんこのすべてについて分析しなくとも良いでしょう。受験者が選択したテーマを分析するには、必ずこれらの要素の一部（または全部）に触れる必要があるはずなので、その分析が深ければ良い答案となります。これらの要素にほとんど触れられていない答案から、深い洞察力を示した非常に優れた答案まで、幅広いものが見られるのがこの規準の特色です。個人差のみではなく学校間格差も目立つので、教師の丁寧な指導が求められます。

規準Ｄ：論文の構成の仕方には定型があるわけではありません。それが効果的であれば、どんな方法を用いることもできます。しかし、構成を意識した受験者とそうではない受験者とでは、議論のわかりやすさと説得力が変わってきます。非常に優れた個性的な考えが示されていても、その論拠が明確になっていなければ、議論は力を失ってしまいます。力のある受験者であっても、こうした例が見受けられます。必要なのは、作品から具体的な例を引用し、自己の考えの正当性をきちんと示すことです。その際直接引用、間接引用ともに脚注をつけることも重要です。

規準Ｅ：ほとんどの受験者が記述課題に必要となる言語力をもっていました。コンピューターを使用している受験者が多いため、漢字そのもののミスは少ないものの、同音異義語による間違いや、文が長すぎて主語と述語の関係がねじれてしまっている例などが見られました。またここでは無闇に難しい語彙を使用することよりも、全体的に調和のとれた、誤解の少ないわかりやすい文を書くように心がける方が、高得点につながります。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

指導において大切になるのは、生徒が、文章読解力、文章力、論文作成力という基本的な力を日常的に養うこと、優れた「記述課題」とはどういうものなのかをしっかりと理解すること、各規準においてきちんと点数を取るように意識することでしょう。

まず日常の授業においては、文学作品の背景や内容を理解するだけではなく、作品を書いた作家の意図や、自分自身にとって作品にどのような価値があるのかを深く考えるように生徒を促すことが重要です。「文学」の授業は知識の集積ではなく、文学作品との出会いによって、受験者の成長を促すものであってほしいと思います。もちろん、技術的な向上を図るために、小論文の課題、漢字のテスト、読解の課題等を常に与えていくことも大切です。

「記述課題」そのものに対する正確な知識を与えることも重要です。「対話形式の口述活動」の目的や、その直後に書く「振り返りの記述」においての「発展」の意識の重要性、「教師の監督下での記述活動」と最終的に提出する「記述課題」との関連等について、正確な知識と概念を教えることが必要です。そのためには、教師自身がそれらの要素について深く理解していることが肝要であるため、経験年数の少ない教師、または日本人同僚がいない場合等は、他の言語Ａのベテランの教師と相談したり、積極的に「言語Ａ：文学」のワークショップに参加したりして、自己の研鑽に努めてください。

Standard level written tasks

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 6	7 - 9	10 - 12	13 - 15	16 - 18	19 - 20	21 - 25

提出された成果物の特徴および適切さ

概ね満足できるレベルです。扱った作品の理解については、多くの受験者が歴史的・社会的背景や作家の背景等も含めて、良く学習していることがうかがえました。しかし、選択したテーマの分析をするときに、必要のないあらすじを述べたり、関連性の薄い知識を披露したりしている論が見受けられました。また論文の書き方をきちんと学んでいないと思われる答案もありました。

評価規準に基づく受験者の到達度

規準Ａ：「振り返りの記述」に書くべき内容について明確に理解していないケースが多く見受けられました。重要なのは「対話形式の口述活動」または「ジャーナル」を通じて、作品の文化的および文脈的な要素に対する理解がどのように「発展」したかを明確にすることです。作品の感想や「対話形式の口述活動」または「ジャーナル」の内容を述べるだけでは不十分です。

規準Ｂ：ほとんどの受験者が作品を良く理解し、必要な知識をもっていることがうかがえました。大切なのは、いかに鋭い「洞察」を示しているかどうかと、選択したトピックに適した知識や理解をきちんと述べているかどうかです。

規準Ｃ：ここでは作者の言葉遣い、構成、技法およびスタイルについての分析が求められていますが、これらのすべてについて分析する必要はありません。選択したトピックに関する作者の工夫をしっかりと分析できていれば良いでしょう。個人差が非常に大きくなっているので、小論文を書くときにこの規準についてしっかりと意識することが大切です。

規準Ｄ：構成の方法は数多く存在しますが、どんな構成法であれ受験者の考えが明確に表現されていれば良いでしょう。大切なのは自己の考えに説得力をもたせるために、作品中から適切な具体例を引用することです。多くの答案は具体例が示されていますが、それを示さずに自己の考えのみを述べると、説得力がありません。また、直接引用のみならず間接引用にもきちんと脚注をつけることが望まれます。

規準Ｅ：多くの受験者が文学論文を書くのにふさわしい言語力を身につけています。しかし、敬体と常体の混用、口語体の使用、不十分なレベルの語彙の使用が見受けられるケースもありました。高度な語彙や文学的表現を駆使した、非常に質の高い答案も見られました。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

教師は日常の授業において、論文の書き方についてきちんと指導することが求められます。特に重要なのは、文章力を伸ばす訓練をすることと、専門用語、語彙を学ぶ機会を作ること、作者の技法について分析する方法を教えること、さらに基本的な文学的論文の書き方（構成法、脚注のつけ方、効果的な結論の書き方等）を指導することです。また、普段から論文の課題等を与えて、生徒の力を継続的に伸ばす工夫が大切です。

次に必要なのは、この「記述課題」について詳しく説明し、重要な要素については強調することです。「対話形式の口述活動」の際にはきちんとメモを取らせ、質の良い「振り返りの記述」を書くことができるようにしましょう。トピックの選択は非常に重要なので、生徒とよく相談し、明確な結論が出るようなテーマを選択するように促すことが必要です。テーマに沿った分析をするように促し、作者の工夫についても分析するように指導してください。受験者が論文を書き始める前にこういったことを丁寧に指導しておくことが望まれます。

自己学習コースの場合は、アドバイザーが「記述課題」を含めＩＢの学習内容そのものに詳しくないことがあります。そのような場合には、コーディネーターや英語のベテランの教師等と連絡を密にして、正確な知識の獲得に努め、受験者がより学習しやすい環境を整える事が肝要です。ＩＢ資料『「言語Ａ：文学」指導の手引き』をしっかりと読んでおくことも重要です。

Higher level paper one

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 2	3 - 5	6 - 9	10 - 12	13 - 15	16 - 18	19 - 20

今回の試験で受験者にとって難しかった内容

多くの受験者はこの試験に対しよく準備しており、良い成果をあげることができました。

規準ＡおよびＢに関しては、多くの受験者が良く出来ていましたが、規準ＣおよびＤの出来具合で結果が分かれました。

今回の試験において受験者がよく準備できていたこと

多くの解答はレベルの高い内容になっていました。中には完璧な解答もあり、十分な学習と準備をしてきた成果が出ていました。

ほとんどの受験者は課題文のスタイル（文体）を理解し、効果的に構成された論評を書くことができていました。

設問ごとの解答結果（強みや弱点）

約60％の受験者が散文を選びました。この課題文は詩の課題文と比べて受験者にとって理解しやすかったようです。一方、詩を論評した受験者の中には優れた解答もありましたが、散文に比べると得点の範囲は大きく広がっていました。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

文章を解釈するとき、特に詩は言葉にこだわりと執着をもって意味を探る訓練が必要です。つまり、文脈の中でその言葉がどのくらいの重みと広がりを持っているのかを見つけることが重要になります。

Standard level paper one

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 2	3 - 5	6 - 7	8 - 10	11 - 14	15 - 17	18 - 20

今回の試験で受験者にとって難しかった内容

論評を書くにあたって満たさなければならない条件を十分に理解していたとは思われない受験者が見受けられました。例えば受験者の約 10%はその解答が短すぎて（原稿用紙１枚半から２枚半）、内容、スタイル（文体）を網羅することができていませんでした。

また、去年に引き続き10%以上の受験者は設問ＡとＢに別々に解答しており、１つの論評としての一貫性に欠けていました。

今回の試験において受験者がよく準備できていたこと

十分な学習と練習を積み重ねてきたことがうかがえる優れた解答が多数ありました。作者の言葉遣い、構成、技法およびスタイル（文体）に関する選択がどのように意味を形成しているかについて、優れた分析と認識が示されていました。

設問ごとの解答結果（強みや弱点）

詩の論評では、表面的に理解した語句や表現を並べただけの奥行きのないものが多く見受けられました。結果的には受験者の解答は非常に似通っていました。

散文の場合、論評は効果的に構成され、作者の言葉や技法の選択についても非常に優れた分析や認識が示されていました。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

受験者には多種多様なテキストを読むことを奨励し、授業中に内容を分析しスタイル（文体）について話し合う機会をできるだけ多く設けると良いでしょう。受験者が書く練習をする場合、原稿用紙１～２枚では内容、スタイル（文体）についての十分な分析を行うことは難しいため、４～５枚で書く練習をするのが理想的です。文学の背景を知るために、日本近代文学史も授業の内容に取り入れることが推奨されます。

Higher level paper two

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 4	5 - 8	9 - 12	13 - 15	16 - 19	20 - 22	23 - 25

今回の試験で受験者にとって難しかった内容

設問にもよりますが、受験者が最も苦戦していたのは、設問で問われていることを明確に理解し、それに対してきちんと解答することでした。例えば「影響」について聞かれているのに、作品の一部の内容について詳しく解説したり、テーマとは関係のない分析をしたりしているケースが見受けられま

した。作品内容を理解しているということを示したかったのかもしれませんが、それが問われていることに対して答えるために不必要な情報では意味がありません。小論文においては「何が問われているのか」を十分に認識して、それを常に意識しながら論じていくことが肝要です。

論文を書くための基礎力が不足していると考えられる答案も多くありました。小学校で習う教育漢字がきちんと書けなかったり、原稿用紙の使い方が間違っていたりするケースが見受けられました。さらに、作品名や作者名を間違っているものもありました。ＨＬにおいては、このような基礎的なミスは避けなくてはなりません。

受験者は２作品以上を分析して、その後にこれらを比較していますが、ここで深い考察が見られたケースは少なく、大抵が共通点と相違点を指摘するだけに留まっていました。高得点を目指すためには、単純な比較だけではなく、多角的な考察をして、その結果に対する作者の意図や目的等まで考えてみることが大切です。

今回の試験において受験者がよく準備できていたこと

作品そのものに対する理解に関しては、多くの答案が十分なレベルに達していました。内容もしっかりと把握されており、引用もきちんと行われていました。ほとんどの受験者が２作品を分析しており、それぞれの作品の分析の後に、比較検討も行われています。したがって、構成に関しても一定以上の水準を示す答案が多く見受けられました。

設問ごとの解答結果（強みや弱点）

設問１：「書き出し」という言葉の定義が、受験者によってかなり異なっていました。文字通り冒頭の１文について詳しく考察した受験者もいれば、冒頭の数ページまたは初めのいくつかの章について分析した受験者もいました。扱った部分があまりにも広すぎなければこれは大きな問題ではないのですが、やはり「書き出し」と書かれている以上、冒頭の短い部分についての深い考察を示すべきでしょう。大きく明暗を分けたのは、設問で問われている「主題にどのような影響を与えているか」ということを認識して論じていたかどうかです。論の目的はこの設問に明瞭に答えることであるため、どれほど詳しく冒頭について解説していたとしても、問われたことに明確に答えていなければ、高得点は望めません。

設問２：非常に多くの受験者がこの設問を選択していました。「視点の設定」について答える場合、やはり多くの受験者は語り手の人称と絡めて論じています。人称の問題については、過去に頻出しているので、授業で扱った学校も多いでしょうし、課題として練習した受験者も多かったことでしょう。そのせいか、一定水準以上の答案が多く見受けられました。特に夏目漱石の『こころ』を学んだ学校が多かったのか、この作品を引用している受験者が目立ちました。確かに「視点」を論じるためには相応しい作品なので、論も説得力をもっています。

設問３：「会話文の持つ役割と効果」というテーマをしっかりと認識しているかどうかが、分かれ目となりました。良い答案は「会話文」そのものの特色について、作品中から例を挙げて解説し、その役割と効果について論じています。しかし一部の受験者は「会話文」そのものではなく、登場人物の発した１つもしくはいくつかの言葉について分析し、その効果を論じています。これでは設問で問われていることに明確に答えているとは言えません。

International Baccalaureate® Baccalauréat International Bachillerato Internacional

設問４～10　解答者なし

設問11：学んだ戯曲によっては、正に現実に起こった事件に題材を取っているので、論じやすかったようです。しかし、現実との間に明確な関係性があるだけに、かえって当然のことだけを示す結果にもつながりかねません。良い答案を書くには、さらに深い分析が必要となります。逆に、民話を元にしている戯曲を論じたケースでは、現実との関係が露わでないだけに、想像力と考察力を活かした独創的な答案が見られました。

設問12：戯曲の中で、家の中が舞台となったり、外の場面があったりと、非常に論じやすい作品を扱ったケースがありました。必然的に論は説得力を持ち、良い分析も見られ、明瞭な結論が示されていました。特に同じ登場人物が、場所によって態度を変えるなどについての優れた考察が見られました。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

論の進め方や構成の取り方に関しては、学校間の差が目立ちました。授業で小論文の書き方について丁寧に指導し、過去に出題された問題や予想問題等を使って、演習を繰り返すことが必要です。作品そのものの読み方の訓練も重要になってくるでしょう。出題されるテーマは予想できないものの、過去に頻出しているテーマを中心に、教師自身が種々の読みを示しながら、受験者が多角的な読みができるように指導することが望まれます。

評価規準を認識するように生徒を促すことも重要です。あまりにも評価規準に縛られることは、かえって自由な発想を制限することにもつながりかねませんが、どのような点についてどのように評価されるのかということは、しっかりと認識しておく必要があります。特に評価規準の高得点の部分を熟読して、何が求められているか明快に理解することが肝要です。

論文作成に関する基本も押さえる必要があります。せめて教育漢字はきちんと書けるように、テストをしたり効果的なドリルを与えたりといった指導を行うことが望まれます。原稿用紙に関する基本的なルールを認識させることも重要です。普段から、辞書を使わず試験形式で練習できる機会があると良いでしょう。

小論文の演習問題に対して、教師が評価規準に沿った採点をすると良いでしょう。そのためには、教師は積極的にワークショップ等に参加して、自身が評価規準に精通し、試験官の採点レベルに近づけるよう努力する必要があります。

Standard level paper two

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 4	5 - 8	9 - 12	13 - 15	16 - 18	19 - 21	22 - 25

今回の試験で受験者にとって難しかった内容

全体的に大きな問題はありませんでしたが、設問の解釈が受験者によって違う場合がありました。例えば「役割と効果」について聞かれているのに、内容について分析したり、「影響」について問われているのに、内容やストーリーを解説したりするケースが見受けられました。また、設問で問われている内容とは直接的に結びつかない、作品のストーリーについて長々と解説している答案もありました。大切なのは、何が問われているかをしっかりと捉えて、それについて答えるためにどのような分析が必要かを熟考することです。その意識がないと、本論が曖昧になり、結論も論拠が薄くなってしまいます。

パソコンの使用が普通になってきたせいか、漢字を書けない受験者が多く見受けられました。試験では作品の持ち込みも辞書の使用も禁止されており、パソコンを使って書くわけではないので、きちんと漢字を書けるようにしておくべきでしょう。少なくとも小学校で習う教育漢字は間違わずに書けることが望まれます。

原稿用紙の使い方を学んでいない受験者も多く見受けられました。作品名にかぎ括弧をつけていなかったり、句読点が行頭にきていたりなど、初歩的な間違いが目立ちました。罫線に横書きの答案もありましたが、ＩＢが原稿用紙を準備しており、また、文学的論文である以上、原稿用紙に縦書きで書くことが望まれます。

今回の試験において受験者がよく準備できていたこと

課題作品については、概ねきちんと読みこまれていました。論を進める際には、作品からの引用もしっかりと行われていました。全体の構成もよく練られており、ほとんどの受験者が２作品を引用した上で、各作品の分析の後に、これらの比較検討を行っていました。

設問ごとの解答結果（強みや弱点）

設問１：「書き出しの文章」というのがどの程度の範囲を指すのかは受験者によって解釈が異なりました。冒頭の１文について深く分析する受験者もいれば、もっと広い範囲を「書き出し」と捉えた受験者もいました。ただし、扱った部分があまりにも広すぎるのでなければ、ある程度の差は問題ではありません。重要なのは、設問の焦点は主題に与える「影響」であるということです。「書き出し」そのものの分析は良くできていても、それが主題にどのような影響を与えているかについてきちんと答えなければ、高得点は望めません。

設問２：多くの受験者がこの設問を選択していました。「視点の設定」について答える場合、やはり多くの受験者は語り手の人称と絡めて論じています。「人称」の問題については、過去に頻出しているためか、ほとんどの受験者が安定した分析をしていました。特に夏目漱石の『こころ』を学んでいた受験者が多く、この作品は「視点の設定」を論ずるのにふさわしいので、よい答案が多く見られました。一部「視点」を登場人物や作者の考え方と捉えて論じた受験者がいましたが、やはりここでは作品を語っている者の視点ととる方が良いでしょう。

設問３：この設問は、受験者によって解釈が分かれました。会話文についての分析ですが、問われているのは「会話文の持つ役割と効果」です。つまり、物語や小説に会話文を挿入することはどのような効果があり、それはどのような役割を担っているかについて分析することが求められています。ところが、会話文の内容についてのみ言及し、重要な一言が作品に与えた影響や、その役割について分析した答案が見られました。しかし、ここで求められているのは、決定的な一言についての考察ではなく、あくまでも「会話文」というものの性質と役割と考えるべきでしょう。

International Baccalaureate® Baccalauréat International Bachillerato Internacional

設問４～６：解答者なし

設問７：詩中の言葉や表記方法という比較的幅広いテーマを扱った設問なので、よい答案が多く見られました。詩人の意図と効果についても、明確な答えが論じられていました。

設問８：解答者なし

設問９：この種の設問では、自己の考えを明確に定めて、その論拠を作品からしっかりと探すことが肝要です。なぜなら、問われていることに対する答えは、肯定でも否定でも構わないからです。いかに自己の考えに説得力を持たせることができるかという点が明暗を分けました。

設問10：最終幕についての効果を分析するというのは、分析対象が明確なので、答案も明確になっています。後はその「効果」についてどこまで深い考えを巡らせることができるかという事が重要です。奇をてらう必要はないですが、誰でも思いつくようなことやいかにも当然な効果のみを分析するのでは、質の高い答案にはつながりません。

設問11：学んだ戯曲によっては、正に現実に起こった事件に題材を取っているので、論じやすかったようです。しかし、現実との間に明確な関係性があるだけに、かえって当然のことだけを示す結果にもつながりかねません。良い答案を書くには、さらに深い分析が必要となります。逆に、民話を元にしている戯曲を論じたケースでは、現実社会との比較に関して鋭い視点を見せた優れた答案が見られました。

設問12：この設問も、学んだ作品によっては、良い答案が見られました。戯曲中に家庭内と外での場面が混在し、そこにおける登場人物の態度の変化等について解析した、説得力のある論が多く見られました。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

小論文についてはどのようなテーマが出題されるか分からないので、パート３の作品についてあらゆる角度からの分析ができるよう、授業で指導を行うべきでしょう。また、過去問題が入手できるのであれば、良く出るタイプの問題を課題として与えたり、授業内で検討したりするのも効果的です。

定期的に小論文の課題を出し、教師が評価規準に沿って採点を行い、今後の改善点等について指導すると良いでしょう。その際に、教師の採点が重要となるので、教師は積極的にワークショップ等に参加して、採点規準についての詳しい知識を得たり、実際にリーダーの採点と照らし合わせてみたりすることが必要になります。

少なくとも教育漢字程度は間違いなく書けるように、授業中に漢字のテストを取り入れたり、使いやすいドリルを紹介したりすると良いでしょう。原稿用紙の使い方についても、基本的なことは教えておくべきでしょう。

自己学習コースを選択した生徒は、しっかりしたアドバイザーを探したり、他の言語Ａの教師に相談したりして、学習内容や試験について正確な知識を得ておくことが重要です。漢字の習得や原稿用紙の書き方等についても、積極的に学んでいくことが大切です。

International Baccalaureate® Baccalauréat International Bachillerato Internacional